

音の象徴性について

(第1部, 1~8章)

村上宣寛

(1982年10月1日受理)

ON SOUND SYMBOLISM (PART I, CH. 1~8)

Yoshihiro MURAKAMI

第1部 歴史的概観

1. 音象徴とはどのような現象か

まず抽象的な定義に入る前に、最初期に音象徴の実験的研究を行った Sapir⁶⁹⁾ (1929) の考察例を挙げることにしよう。Sapir は心理学者としてよりも言語学者としての方が有名であり、同時に彼は人類学者、ピアニスト、音楽・文芸評論家でもあり、詩人でもあった。Sapir は言語における象徴を関係象徴 (referential symbolism) と表出象徴 (expressive symbolism) に分けて考えた。関係象徴とは、ある特定の言語における母音と子音の意味のある組み合わせが、音の間の任意の連想関係と、長い歴史的発展過程の中で様々な社会において確立された音の意味関係によって、機能的な意義を持つようになった現象を指している。例えば少年 (boy) という言葉と男 (man) という言葉を取り上げてみよう。「boy」という音と「man」という音の間には何の関係もない。しかし、意味的には極めて近い内容を持ち、これらの言葉を聞いた人はかなり類似の心理的経験を持ち、そしてさらに年令と背丈の違いの感情をいだくはずである。つまり、「boy」、「man」という音節は意味内容を離れても若さや大きさに関する感情的意味を持つことが可能であると思われる。これらの感情的意味は、人類の巨大な文化遺産である言語を学習する間に無意識の内に我々の身に付いたものと思われる。一方 Sapir が表出象徴と名付けたものは、イントネーションや発音のダイナミクスにおける象徴であった。例えば、「君は彼が死んだと言った？」と「君は彼が死んだと言った。」という2つの文章を考えてみよう。2つの文章は全く同じ音から構成されているが、イントネーションが異なっているだ

けである。しかし意味は全く異なったものとなる。つまり、イントネーション自体が疑問文あるいは平叙文の意義を持っている。また小さい (tiny) という普通の単語と小ーさい (teeny) という基本的には同じ意味を持つが、／イー／という音によってその意味が強められている単語が存在する。Sapir は象徴を表現するに当って、発音のダイナミクスだけでなく音要素の用い方に一定の偏向があるのではないかと問題を設定した。そして大きいー小さいの意味次元に限定して記念碑的な実験研究を行った。Sapir が問題にしたような事柄は音象徴の典型的な例であり、研究の内容と考察は後に触れることにする。

ところで音象徴について最初期に実験研究をしたのは Sapir (1929) であるとしても、言葉の音とそれが持つ意味の対応関係という問題について考察をめぐらそうとすると、必然的に古代から現代にいたる言語哲学者のおびただしい論考を前にせざるをえない。そして、直ちに一心理学者に取り扱えるテーマではないことを認識せざるをえない。従ってここでは範囲を限定して、哲学者としては Plato を中心に詳述するにとどめ、Plato 以後の思想的流れは簡単なスケッチにとどめたい。

2. Plato⁶¹⁾ のクラチュロスについて

Parain⁶²⁾ (1942/1972) によれば、Plato の同時代人達の大部分は、ものの名前とそれが指し示す事物の間に何らかの本性的つながりがあると信じていたと言う。つまり、1つの名前には本性的に正しいあり方で1つの事物が対応しており、我々が犯す思考上の誤りや陳述の錯誤は、存在しないものに対してある名前を当てはめたり、あるいは陳述することに

よって引き起こされるものであると考えた。つまり、本性的に正しい名前を認識すればそのような錯誤が引き起こされるはずはなかった。しかし現実には感覚や思考の錯誤は存在し、その理由として本来正しい名前が太古の時代には知られていたのに、時代を経るにつれて命名者の意図を理解できない人々が増え、誤解を重ね、誤って言い伝えられている間に正しい綴が失われてしまったからであると考えることができる。Platoの同時代人でこの本性説を支持していた哲学者としては、神秘的な数の実在論で知られるPythagoras (580-500 B.C.)がおり、他にはEpikouros (341-270 B.C.), Protagoras (485-411 B.C.)を挙げることができる。Plato以前にはつきりと名前の本性説を否定し、ものの名前と事物の間には任意的な対応関係しかないという規約説を主張したのはDemokritos (460-370 B.C.)だけであって、その後この規約説はProtagoras (485-411 B.C.), Aristoteles (384-322 B.C.)に引き継がれるが、近代言語学の重要なテーゼとなるにはSaussure (1949/1972)を待たなければならなかった。

Platoのクラテュロス大きく2部に分れ、第1部(1-37)は主としてHermogenesとSocratesの対話であり、第2部(38-44)は主としてCratylusとSocratesの対話からなる(水地²¹, 1974)。第1部ではまずSocratesはHermogenesの規約説を理論的に吟味することからはじめ、規約説の根拠を、1)同一の事物が各々の国の言葉で違った名前と呼ばれることが多く、それ故、名前は各々の社会で人々の取り決めによって定められたものである、2)各々の個人は1つの事物に対して気ままに私製の名前を用いることができる、の2つに分割した。1)に対しては、(a)言命には真と偽の区別があり、名前もしかりである、従って真なる名前を用いるべきである、(b)事物には固定した本質があり、名付けることも気ままにではなく本性に則して行われるべきである、(c)名前は事物の本質を識別し教示するための道具である。等の理論的根拠で否定した。2)に対しては、各人が気ままに私製の名前を用いれば思想の伝達は不可能になるという理由を挙げ、名前は本性的なものであり命名は特別な知識を持つ者のみが正しくなうと結論した。

次にソクラテスは、第1部の後半で以上の結論を実例に則して実証する作業に取りかかった。まず英雄や人間に与えられた固有名詞は、その本性を現さないとして退けられ、永遠に存在するはずのもの

名前の原意の考察作業が企てられる。その際Socratesが用いた方法は、言葉を部分に分解していく方法であり、名前を複合語としてとらえた。複合語が事物の本性を表すためには、必然的にそれを構成する名前の要素が事物の本性に似ている必要があり、Socratesはためらいながらも綴の要素の性質に言及して、r(ロー)はあらゆる動きを表し、i(イオータ)はあらゆるこまやかなことを、ph(ペイ)、ps(プセイ)、z(ゼータ)は強い息吹を伴って発音されるから風や振動を、 δ (デルタ)や τ (タウ)は舌を押し付けて発音されるから束縛と静止を、 λ (ラブダ)の発音の時には舌がよく滑るので滑るもの、ネバネバするものを、 ν (ニュー)は音がこもるので内部性を、 α (アルパ)は大きいものを、(エータ)は長いものに、 o (オウ)は丸いものを表し、それぞれ命名者がものの性質を模写するために用いたものであるとした(426C-427D)。そしてついに、Cratylusに替って名前の本性説を根拠づけることに成功した。第2部ではCratylusを対話の相手に引き出し、第1部で根拠づけた本性説を再吟味する作業に取り掛かる。まず、名前と事物が似ているとはいかなることであるかを考察し、取り決めによって成立する名前もありうることが示される。さらに、虚偽を語ることが可能であることから虚偽の名前もありうるということが示される。名前の本質を知ることが事物の本質を認識する方法として最上のものであり、これ以外のものはないというCratylusの主張はSocratesによって批判され、事物認識の最良の方法は事物をそれ自身によってか、あるいは似た別の事物を通して知る方法であると結論される。さらに事物に適合していない名前の原意が考察され、名前の本性説は否定されてしまう。

PlatoのCratylusにおける真意について研究者の見解は一致していないという。しかし、SocratesがHermogenesの規約説とCratylusの本性説を共に批判しつつ再吟味を行い、第3のテーゼが示されるかに見えるところで議論は終わってしまい、肝心の第3のテーゼが何であったのかは明らかではない。水地(1974)によれば、Steinthal他の研究者はPlatoの真意は結局は規約説であったという。しかし別の人々は、現実の名前には規約説の当てはまる場合もあるが、理想的な名前は本性的であるというのがPlatoの真意であるという。筆者にはPlatoの真意がいかなるものであったかを論じる素養もないが、他の著作やCratylusの議論から受ける

印象による判断では後者ではなかったかと思われる。と言うのは、言葉の原意の究明の大部分は Plato 自身の創意によるものであり、その上にそれに費やされる分量は全編の半分にも及んでいる。さらに、Plato が行った原意究明の手法は言語学的に肯定される方法であり、当時としては極めて独創的なものであった。言葉の原意究明の中には戯れに近いものがあつたとしても、その努力の全てが戯れの産物であつたとは思えない。むしろ、Plato は言葉は本性的であるべきだと考え、言語分析のための技法の開発に真剣に取り組んだ結果が Cratylus の議論となつて現れたのだと思われる。しかし、Plato の時代に彼自身の独創のみによって、言語解析を誰にでも納得できる方法で究明することは無理があるのは当然であり、Plato は本性説の限界もわきまえていたに違いない。それ故改良された本性説は最後まで明らかにされず、それに至る規約説と本性説の批判的吟味のみが Cratylus の中で取り上げられ、Plato の真の独創や真意は慎重に戯れの中に隠されていると考えられる。そうでなければ、Cratylus が言語学にとつても貴重な文献でありえたはずはない。

3. Plato のテアイテトスにおける言語観

田中⁴⁹ (1974)によると、この著作は Plato がおよそ60歳位の時に書かれたものと言う。そしてこの対話編は終りに近づくに従つて後期著作の文体的特徴を示すようになるので、かなり長い期間に渡つて書き継がれてきた可能性がある。テーマは副題に示されているように「知識について」であり、3つの答が出され、それらがことごとく否定されている。その3つの答とは、1)何かを感覚することが知識である、2)思いなしが知識である、3)思いなしにロゴスを加えたものが知識である、というものであつた。しかしこれらの知識に関する議論は大きな骨格を形作り、著作にまとまりを与える役割をはたしているにすぎず、実際の議論は、感覚がすなわち知識であるという説を Protagoras, Herakleitos 説に結び付けて大掛かりな批判を展開する部分が圧倒的に多い。言語に関する注目すべき発言は第3部39(201 E)から特殊なわき道の議論として展開される。Socrates は夢のような話だがこういう事がある人から聞いたことがあると前置きをし、次のような学説を紹介する。

それはつまり、われわれもわれわれ以外のもの

もそれから合成されているところの、基本的な、たとえばちよどももの要素みたいなもの(字母みたいなもの)があるのだが、それは言論を受けいれぬものだといふのである。すなわち、そのおのおのはそれ自体としてそれ自体にとどまる限り、ただその名前を呼びうるのみであつて、それ以上ほかにも何もつけ加えて言うことはできないのであつて、「ある」とも「あらぬ」とも言うことはできないのだ。……(中略)……といふのは、言論とは何であるかといへば、名辞(名称)を組合せたものがすなわちそれだからである。してみれば、ものの要素(字母)となるものは没言論的であり、不可知なものであつて、ただ感覚されるにすぎないものなのであるが、これに反して、これら要素を束ねたもの(シラブル・綴り)は可知的であつて、語られもするし、真なる思いなしをもって思いなされるものなのである。(201 E—202 C)

この学説は言葉使いからすると誰か特定の人の学説であつたらしく、Plato 自身のものではなかつたようである。Socrates の口から表されるこの学説に対する唯一の不満は、ものの要素(字母的なもの)となるものは不可知であるが、これらを束ねたものの種類は可知的だといふ論理的矛盾であつた(202 E)。そしてその学説との調和を保つために、綴はすなわち字母だとして想定されるべきではなく、字母からできてはいるが字母とは異なるものであつて、それ自体に単一の形相を備えもつていふところの一種単独の品種である(203 E)とした。米沢⁴⁸(1977)によれば、この「ソクラテスの夢」は初期対話編 Cratylus の議論をより徹底的なものにし、一般化したものであるといふ。この説は言語におけるシラブルと字母の関係になぞらえて、「第1のもの」とそれらから合成された「われわれや他のもの」を考察したものであり、「ティマイオス」においてはこの説明原理が自然界の統一的説明原理として適応されるといふ。この「夢」については例えば Wittgenstein⁴⁹(1958)も「哲学的探究」46項でこの同じところに注目し、Russell の個(individuals)と Wittgenstein の対象(Gegenstande)はこのような第1の要素であると述べた。そして木の視覚像を取り上げて、その像の要素ははたして存在するのか、また、複合したものは一体いかなる意味をもつかといふ議論を展開し、引き続いて言語ゲームの考察に移っていく。20世紀の哲学者で Plato の言語観

を引き継ぐ哲学者はおそらく Russel, B. であろう。Russel は Wittgenstein のいう、命題と事実の画像 (picture) との構造の類似性には賛意を示しつつも、彼の神秘主義に徹底的な反ばくを加え、自分自身の哲学を「論理的原子論」という名で呼んだ (Russel, 1959/1960)。Russel の哲学は Plato のものと同じように読みやすく、一見理解しやすそうに思われるが、相矛盾する主張を Russel の著作の中から集めることはたやすく、著作全体が1つの Plato 的対話をなしている。

4. Plato から現代心理学へ至る思想の流れ

ごく簡単に Plato 以後の言語哲学から現代言語学、現代心理学に至る思想のスケッチを試みることにする。まず、Plato 以後の言語哲学では名前の本性説にくみする意見が圧倒的に多い。例えば、比較言語学では Jones, W. が1786年にサンスクリット、ギリシャ、ラテン語の基礎語彙の類似性を指摘したことに始まり、Schlegel, F. によって初めて「比較文法」という命名が行われた。その後、Grimm, J. によって「音韻推移」、「変音」、「母音交替」という重要な法則が発見されたが、それらはその時代特有のロマンチックな雰囲気の中から生まれたものであった。Schleicher, A. はこの比較言語学を集体成し、その手法を用いて印欧祖語を再建しようとした。つまり、人類全体の基本的・根源的言語、「アダムの言葉」の再現を試みた (風間⁶⁷⁾, 1978)。この根源的言語に向けられた情熱が未来へ向う場合として、Descartes が試みようとした「普遍言語」を挙げることができるし、また Leibnitz の試み、すなわち単なる任意的な記号ではなく思考の内容を分析し、根源的な单子 (モノイド) に対する思惟のアルファベットともいうべき真の記号を発見して、それをもとに「記号法」を構築しようとしたことなどが挙げられる。Leibnitz の構想は現代数学の微積分学における記号法となって結実すると共に、その構想は現代の記号論理学や計算機言語 (例えば PROLOG) へ受け継がれた。また、このような思想的背景は Zamenhof によって 에스ペラント という人工語が産み出される母体となっている。そのほか Plato 系統に属する言語哲学者には、「言語起源論」(1772/1972) で有名な Herder, J. G. が挙げられる。彼の言語起源論は人間の精神能力の発展の結果として言語をとらえようとするものであり、彼の思想は Humboldt を通して現代にまで強い影響を与え、さらに

また最近 Herder の再評価がなされるようになった。一方 Humboldt も Kandt, Herder の言語観を媒介にして言語の発生論的考察を行い、言語を所産 (エルゴン) ではなく、活動 (エネルギー) であると定式化している。Steinthal も言語起源論で模倣説をとらえ (Rosenkranz, 1961)、この言語哲学の流れは Sapir, Worf の言語相対性仮説へつながり、また Weisgerber, Chomsky に影響を与えた。

渡辺⁴⁹⁾ (1973) のまとめに従えば、このプラトン系統に属する言語哲学者は全ての民族にとって互いに同一であるのは客観的な外界のみであって、魂の印象、音声言語、書記言語は互いに異なっているとみなしている。一方アリストテレス系統に属する言語哲学者では、外界と魂の印象の二者が全ての民族で共通であり、音声言語と書記言語が互いに異なっているとみなしている。Aristoteles は Plato 以後名前の規約説を主張した最初かつ最大の哲学者であり、その後のスコラ哲学も基本的には規約説をとっている。言語記号の任意性をはっきりと主張し、現代の言語学に大きな影響を与えたのは Saussure⁶⁸⁾ (1949/1972) の「一般言語学講義」であり、また Wittgenstein (1958/1971) の「哲学研究」であったといえよう。

一方操作主義を主張して心理学に大きな影響を与えた Bridgman は、概念を客観的操作の連続として定義づけ、明らかに Bloomfield (1933/1962) の経験的事象を重視する言語観に親近性をもっている。Bridgman の心理学に対する思想的影響は、Stevens (1935) によって明確に記述されている。Ogden & Richards⁶⁶⁾ (1923/1969) や Morris⁶²⁾ (1938) も心理学者に大きな影響を与えたが、言語記号を経験的事象に対して任意に割り当てられたものとみなす点で共通している。さらに Watson⁴³⁾ (1930/1968) の行動主義は Pavlov (1927/1974) の条件づけ理論の強い影響を受けたものであり、条件づけ理論に基づく極端な意味理論は、その後 Bousfield や Osgood によって集成され、意味の媒介理論が提案されてさらに精密なものとなった。例えば Berlyne⁶¹⁾ (1965) のように、思考までも習慣反応の連鎖として記述するものが現れた。最近の認知的立場に立つ言語心理学研究は、心理学の歴史からは例外的な現象であるし、行動主義と操作主義の影響が色濃いために心理学者の大部分はまだ依然としてアリストテレスの言語観をもっている。

5. 近代言語哲学における象徴表現の考察例

プラトン系統に属する言語哲学者の言語における象徴的表現の例と、その説明原理の例を挙げることにする。まず擬音語の原理を言語起源に関係づける例として、19世紀の言語哲学者 Crutius の考察を挙げる。彼はインドゲルマン語に関する記述の中で、ガンジス川から大西洋に至る全民族は *sta* という同一の音群でもって「立っている」(*stehen*) という表象を現していること、また、音群 *plu* は全ての民族において「流れる」(*fließen*) という表象と結びついているのは偶然ではありえないとして、太古の言葉は指示されている表象と音の間に何らかの関係があるということを前提にしない限り、言語の発生を説明することはできないと主張した (Cassire⁽⁵⁾ 1964/1972)。ストア派の哲学者や Leibnitz も、音もしくは一定の音群の根源的意味をとらえようと試みまし、さらに Humboldt は文法上の関係の中でもこのことが明らかにされると信じていた。例えば、*st* という音群は永続性や固定性の印象を、*l* という音は融解・流出の印象を、*w* という音は流れ、漂う動きの印象を表現しているばかりではなく、このことが語の形式原理の中にも見出すことができると信じていた。Humboldt の見解の中に、Plato がクラテロスの中で述べたものの名前の本姓説の発展の姿を見るのは容易であろう。音群 *sta* に関しては Steinthal (1860) が Crutius や Humboldt 以上に分析的な見解を表明している。すなわち、彼によれば語根 *sta-* は印欧語の最も古い層に属するものであり、*s* は運動の観念の反映を表し、*t* は運動の中に立ち表れてくる意図的な障害を表すものであって、言語の創始者達がそのような分析的な意識をもっていないにしても *sta* の本性に関する意識はもっていたとする。こういった音と意味とのつながりこそが言語の創造を促す力であり、これがなければ言語が創造されることはありえないと主張した。この Steinthal の見解の真理性を経験的に検証することはできそうにないし、またそれ程の価値もないと思われるが、それにしても名前の本姓説の極端な発展形態をこの見解の中にみることができる。19世紀の言語学者の間でこのような見解が一般的であったことを考えあわせると、Saussure (1949/1972) における言語記号の任意性の強調がより一層印象的なものとなる。

空間的諸関係の音韻による比喩的表現の例を Cassire (1964/1972) に従って挙げてみると、例えば、

Grimm, J. はインドゲルマン語の記述の中で人間の音声の全ての音の中で *k* は最も完全な子音であり、*k* ほど問の本質をよく表現しうるものはない、また、*t* は *k* と同じ位の力で生み出されるが、それは突き出されるというよりは発音されるのであり、より確固たるものを備えている、それ故 *k* は探求し、訪ね、呼び求めるに対し、*t* は示し、意味し、答えるのであると主張している。Humboldt もまた、一定の母音が対象と話手との距離の大小を示すものとして用いられ、ほとんどいつでも *a, o, u* は距離の大きいことを、*e, i* は距離の小さいことを示すという。さらに Wundt も、ある子音や子音群にはある特定の感性的傾向が内在しているとして、「求心的」な傾向の音韻群 *m, n* と、「遠心的」傾向の音韻群 *p, b, t, d* がはっきり区別されるとしている。Humboldt は特定の母音群、及び子音群にみられるこのような「基本的観念」によって言語の形成が促され、とりわけ指示代名詞の中にこの傾向を確認することができるとしている。例えば、鋭い母音は話しかけられる人物の場所、つまり「そこ」を表現し、話している人物の場所はより鋭い母音で表現されるという。また、子音的要素による指示代名詞の形成に関しては、遠方への指示の役割をはたすのはほとんど常に *d* と *t*、または *k* と *g*、*b* と *p* の子音群であり、この使用法の点ではインドゲルマン語、セム語、ウラル・アルタイ語などが明らかな一致を示しているという。そして人称代名詞は、一般的に場所的な意味及び起源をもつ語に帰着させることができると証明しようとした。しかし、Gabelentz は事実この逆、すなわち人称代名詞を中心にして場所を指示する代名詞が形成されたとする。これらの言語哲学者の主張を全て確認することは本論文の目的ではないが、少なくとも人称代名詞と指示代名詞の類似性が普遍的に存在することは否定できない。

6. 音象徴の定義

音象徴とはいかなるものかについて本格的に考察し、定義づけようとした心理学者はほとんどいない。心理学者の考察は、音象徴にどのような下位分類が可能であるかに関するものがほとんどで、唯一の例外は Peterfalvi⁽⁶⁾ (1970, p. 20) のものである。彼は最初の一節を定義についての考察にあてて、「音象徴とは人間による音声記号の必然的な創造、もしくは利用である。」と定義した。必然性という点で Saussure 的な定義と対立するものであることが指

摘されている。定義そのものは Peterfalvi のものでかまわないかもしれないが、あまりにも抽象的で利用価値を見出すことは難しい。むしろ半世紀前の言語学者 Jespersen (1922) の音象徴に関する記述は簡潔かつ充分包括的であり、それをここで要約的に示すことによって定義に替えたい。

Jespersen (1922, ch. 20) もまた、音と意味との間に本質的な関係があるという Plato のクラテュロスや Humboldt の記述例を挙げ、ほとんどの言葉がこのような音象徴に当てはまらないにしても、どうしてもある観念を表現するのに本能的に適切だと思える言葉と、多少不協和音がある言葉があるのは否定できないと主張した。そして彼は音象徴と思われる場合を 6 項目に分け、それぞれに対して豊富な実例を提供した。その内訳は以下の通りである。

- 1) 直接模倣 音を直接に模倣する最も簡単な場合である。例えば金属音は clink, clank, ting, tinkle で、水の音は splash, bubble, sizz, sizzle で表現される。興味深いのは国が違えば同一の音に対して違った綴りが割り当てられているケースであり、例えばニワトリの鳴き声は英語では cock-a-doodle-doo だが、デンマーク語 kykeliky, スウェーデン語 kukeliku, ドイツ語 kikeriku, フランス語 coquelico となっている。
- 2) 音の創造 何度も繰り返される音から言葉が形成される場合である。例えば、フランス人が英国人を God-damn (godon) と呼んだり、中国でイギリスの兵士が A-says, か I-says と呼ばれている場合である。また横浜でイギリスかアメリカの水兵は「Damn your eyes.」からダムライス人と呼ばれていたという。
- 3) 運動の記述 特定の運動にいつも伴う音があるとき、その音によって運動が表現される場合である。動詞で bubble, splash, clash, crack, peck などが挙げられる。またそれ程強い音でない場合は、l- 式の音連続で始まる言葉が多い。fl- : flow, flag (デンマーク語 flagre), flake, flutter, flicker, fling, flit, flurry, flirt, sl- : slide, slip, slive, gl- : glide。
- 4) 事物と外観への拡張 象徴的命名を事物に拡張する場合であり、事物と音との間に多少連想関係がある。高い周波数と明るいこととの間に自然な連想関係があり、その逆も言える。例えば light, dark というそれにふさわしい形容詞がある。母音 /i/ は明るいことを /u/ は暗いことを

指すのに適当である。例を挙げれば gleam, glimmer, glitter があり、それに対して gloom がある。

- 5) 心の状態の記述 運動の記述で用いられた言葉が心の状態を表す言葉へ意味を変化させた場合である。嫌悪や軽蔑を象徴的に表す言葉の数は多い。鈍い高母音で表される場合は blunder, bungle, bung, clumsy, humdrum, ……、sl で始まる場合は slight, slim, slack, sly, sloppy, ……などがある。
- 6) 大小と距離の表現 例えば母音 /i/ が小さい、弱い、不明瞭な、あるいは上品なものを象徴するようなものである。この例は色々な国語中におびただしい例があり、little, petit, piccolo, piccino などである。また、これは女性接尾詞などへ拡張して用いられる。

以上の 6 項目が Jespersen が音象徴 (sound symbolism) の例として挙げたもので、このような例を包括した概念として音象徴を暫定的に定義づけることにして心理学的研究を吟味していくことにする。なお、「音象徴」という言葉は小熊²⁷⁾、村上²³⁾などに基づいており、他には語韻象徴(筑島⁶⁷⁾、⁶⁸⁾守²⁹⁾1981)、音声象徴(永江1978)という言葉がある。厳密にそれらを区別するとすれば、音象徴という場合はオノマトペなど直接模倣を含む概念であるのに対して、語音象徴は言葉の中の構成要素の音韻の象徴性に限定した概念といえる。ただし、両者を厳密に区別することはほとんど行われていない。英語でも Jespersen は sound symbolism という言葉でより包括的な概念を提出したが、その後心理学者は Sapir (1929) の用いた phonetic symbolism という言葉を用いている。しかし、その言葉は必ずしも言葉の音韻の象徴性にのみ使われてはいない。ここでは一応「音象徴」という言葉をより一般的な文脈で使用することにして、「語韻象徴」という言葉は自然言語の中の音韻の象徴性に限る場合のみ用いることとする。

7. 名前の研究

最も初期に属する研究では人名からその人の性格を推定するものがあり、本当の人名であったり、架空の人名、あるいは無意味綴が研究の対象になることもある。次の節で扱うことにするが、名前がその対象物に相応しいか否かを研究するアプローチは描画という扱いやすい対象を見出しておびただし

い研究が生まれることとなった。English⁽⁷⁾(1916)の研究は第1実験は心理学者の名前、第2実験はほとんど馴染みのない科学者の名前、続く2つの実験では無意味綴を用いて500人にのぼる内省報告を採った。しかし、全体としては否定的結果で被験者の間に一貫した傾向がなくて、一定の名前に対して特定の性格像を見出すことはできなかった。それでも English は、Dickens の小説に出てくる人名で例えば Chuzzlewit や Pickwick にみられるような登場人物はその性格に相応しい名前が与えられており、この種の研究を続ける必要があると結んだ。

Alspach⁽¹⁾(1917)は English の提案を受け、一人の被験者で50の無意味綴を人の名前であると音声提示して、その名前に相応しい人の性別・国籍・年齢などを定量的に分析した。さらに無意味綴の分析から大きさに関しては bl, g, chō が、穏やかさには p, sh, rās, sū が、のろさには p, sh などが、寛大さには thub, p, gāw などが、柔らかさには thā, moj, mof などが当てはまっていることがわかった (Table 7-1)。そして被験者が頻繁に用いるカテゴリーは性別、年齢、身長であり、English と

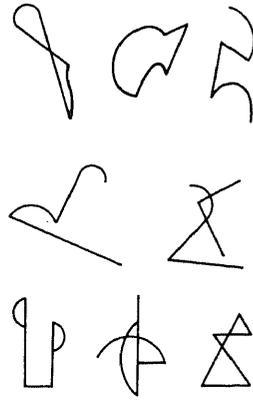


Fig. 7-1 Examples of drawing used in Fisher (1922)

一致は25%であった。反応時間は、一致した場合5.4秒、 $\frac{1}{2}$ の一致11.8秒、反応なし21.7秒であり、一致がみられる場合は反応時間も速くなる傾向があった。また、与えられた無意味綴が必ずしもその対応する描画や写真の名前とならない場合も観察された。Usnadze⁽¹⁰⁾(1924)の研究も内省報告が中心であるが、反応に基いて被験者のタイプ分けをしている点が興味深い。無意味綴は6つのみであるが、10

Table 7-1 The correlation between sounds and personal characteristics found by Alspach (1917)

GROUP X		GROUP Y	
Big	bl, g, chō	Snappy	Koikert, gēn, Kōldāk
Smooth	p, sh, rās, sū	Active	zoiyat, kird
Slow	p, sh, tāquū, blāg	Clean-cut	Koikert, Kōldāk, tōw Kīlom, Linrēwēx, kird
Broad	thūb, p, gāw	Definite	gēn, Spren, kārnth
Generous	kōnv, ōw, ō, rūp	Thin	fisp, Lisrix, in, bix, rin, whin, Linrēwēx
Soft	thā, moj, pōf, quāj, mēth	Sharp	Kōldāk, tōw, Brōb, Grib, tūp
		Hard	chō, Brōb, thāsp, Stisk

の結果の一致率は全体では61%にのぼり、強さについては100%の一致率で、最低は社会的地位の27%だった。

Fisher⁽⁸⁾(1922)は一連の名前の発生と理解に関する研究で、かなりの内省資料を収集している。刺激としては、後に描画と音の対応づけ必究として発展していく、曲線と直線からなる無意味な描画(一例を Fig. 7-1 に示す)と多数の人物写真であった。一方対応づけをもとめた無意味綴は1音節、2音節、3音節のものであった。結果は簡単には要約できないが、Fisher が仮定した無意味綴と写真、無意味綴と線画との対応関係が一致したものは47%、 $\frac{1}{2}$ の

人の被験者に4つの質問を用いた組織的観察法を行った。銘々の意図から被験者は2つの一般的なタイプに分かれる。第1のタイプは提示材料に対する直接的関係で特徴づけられ、被験者は無意味綴に対して直ちに直観的に連想を働かせて対象を見いだすが、その根拠が意識されることはない。これに対して第2のタイプはより自由で、拘束がないように振る舞う。これには2つの下位タイプがあり、1つは幻想的な想像を働かせるタイプ、もう1つは生真面目なタイプであった。Usnadze はさらに銘々の要因を分析して、それが綴と母国語の単語との連想的要因(assoziativer Factor)、綴と対象物の過去経験

に帰着するゲシュタルト関係要因 (Gestaltverwandtschaftsfactor), 感情的要因 (emotionaler Factor), 及び深層心理に由来する心理的深層要因 (psychischen Tiefenschichtfactor) であると主張した。ところが Usnadze(1924)の研究は Fox (1935) によって手厳しく批判されている。すなわち, 1) 少ない言語報告 (せいぜい55) で一般化しすぎたこと, 2) 内省報告に訓練されていない被験者を用いたこと, 3) Usnadze が言語報告をそのまま正しいものと信じていること, 4) 統計的裏付けがないこと, 5) 言語報告が選択された結果が否か明らかでないこと, の5点であった。

名前の相応しさを内観報告を中心に研究していく方向はこの Fox の批判が的をえていたのか, あるいは Fox のように描画と無意味綴の対応を定量的に分析していく方向が受け入れられたのか, Werner (1929) の相親性概念を用いた研究以外ではみられなくなった。得られた言語報告の分析の困難性が認識された結果であると思われる。これ以降, 音象徴の研究は定量的方向をはっきりと採るようになった。

8. 描画と音の対応づけ研究

曲線と直線で構成された描画と無意味音節との対応づけ研究は, 音象徴の研究の中で一つの大きなグループを作っている。その理由としては, 描画というデモンストレーション効果のある視覚刺激を用いているために印象が強かったためと, もう一つは単純な統計処理が適用できて数量化が極めて容易だったことが考えられる。前節で述べた名前の相応しさに関する研究が内観報告を重視しすぎたために行き詰まったのと好対照をなしている。最初の描画と音との対応づけの研究はゲシュタルト理論を支持する一つの証拠として Koehler (1929) によって提出され, 後にもしばしば引用されたために有名なものとなった。実験は刺激として曲線的な絵と直線的な絵 (Fig. 8-1) を被験者に提示し, それに malu-

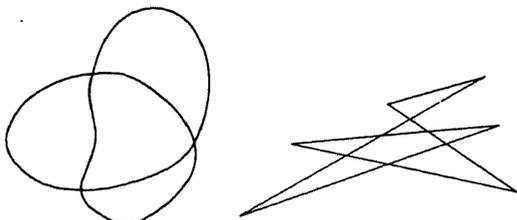


Fig. 8-1 maluma or takete figures used in Koehler (1929)

ma か takete かどちらか相応しい名前を当てはめるようにもとめたものであった。理論的には曲線的な絵に maluma を対応させるかあるいは takete を対応させるか確率は50%であるはずであるが, 実際には被験者の97%は maluma を曲線的な絵に, 94%は takete を角ばった絵に対応させた。

Fox (1935) は Usnadze (1924) の研究や当時の音象徴理論を批判して, 本質的関連性 (intrinsic connection) は哲学上のもので科学的方法では扱えないとし, 描画と無意味綴との対応づけ研究を本格的に開始した。実験はよく訓練された被験者を5~6名しか使っていないが, 10シリーズからなる膨大なものであった。Fox の用いた描画と無意味綴は Fig. 8-2 に示してある。第2実験から名前の選択理由の分類結果を引用すると, 以下のようなカテゴリーが成立した。

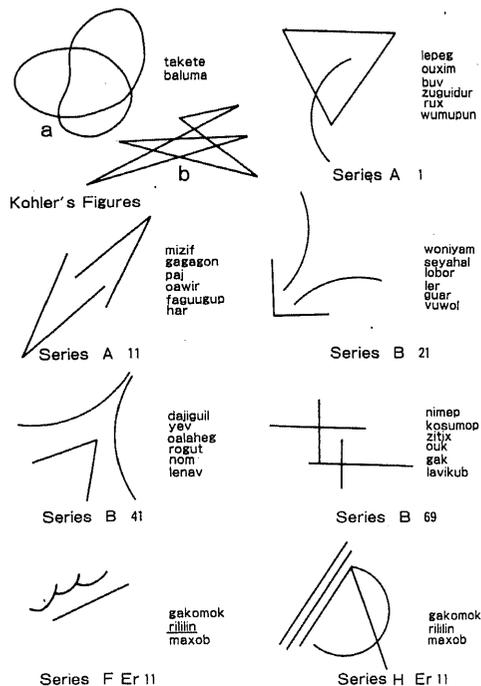


Fig. 8-2 Examples of word and drawing used in Fox (1935)

- A) 連想によるもの これは次のような下位タイプに分かれる。1) 無意味綴が描画に相応しい言葉を思い起こさせる場合。2) 描画が言葉を思い起こさせ, その言葉に似た無意味綴が選択される場合。3) 無意味綴が特殊な言語の言葉と解釈される場合。
- B) 属性によるもの これは次のような下位タイプに分かれる。1) 無意味綴と描画の形式的特徴による場合。2) 描画的, あるいは形式的特徴以外に

よる場合。3)無意味綴の見掛けが描画に当てはまる場合。

C) 全体的印象によるもの 下位タイプは以下のとおり。1)フィーリングによるもの。2)フィーリングが挙げられないもの。

D) 否定的な場合 つまり、被験者が満足できる対応づけの理由を見い出せないときを指す。

E) 部分的な場合 やはり被験者は選択理由に満足ではないが、部分的には支持できるものを指す。

Fox は第 7 実験でそれぞれの無意味綴に対して特徴的だとされる言葉のリストを挙げ、さらに分析し、文字単位での音象徴を調べたが個人差が極めて大きかった。しかし、St という被験者だけは彼女自身の音象徴システムを作りあげた。彼女によれば a は何か広がったものであり、b は重さや大きさを意味し、d は重さや高さを、l は長い、わずかに曲った線であり、m は円弧を意味し、q は短い直線か角度を、s は渦を意味するといふ。被験者 St はこの音象システムを一貫して用いたといふ。訓練によって音象徴を判断する能力が増大するという最初の記述といえよう。続いて Fox は文字単位で相対頻度を採り、i, z, k などの文字が特に鋭さを表現し、m, l, u, b などが滑らかさを表現することを確かめた。

第 9 実験では Koehler の図形と maluma, takete という無意味綴が用いられ、78 名もの被験者を用いて追試が行われた。結果は圧倒的多数の被験者が円い図形に maluma を対応させ、Koehler が音象徴の極端な例を挙げていることを確かめた。

Irwin & Newland¹⁰⁾ (1940) も Fig. 8-3 に示し

た描画と無意味綴を対応づける研究を行った。306 名の子供を被験者に用いた点が特徴的で、綴、描画も 1 対づつ用いて強制選択させている点が Fox と異なっている。結果は音象徴の発達の側面が取り出されて興味深い。つまり、年令もしくは学年が高まるにつれて実験者が意図した方向への対応づけが増加 (Fig. 8-4) し、また高い年令では IQ との有意な相関が取り出された。いわゆる年少児が相貌的知覚にたけ、年長になるにつれてより客観的な知覚になるという一般的な期待とは逆になっている。音象徴の研究においても、また相貌性の研究においても常に Werner (1929) の相貌性理論になにか根本的な欠陥があることを示している。

一方、Bartlet (1932) が記憶に関する研究の中で用いた絵をかかせる実験の応用例が Hall & Oldfield¹¹⁾ (1950) にみられる。刺激は Fig. 8-5 に示したものであった。被験者は下に示した言葉にふさわしい図を 2 つの描画から選択しなければならなかった。40 名の被験者による主実験での結果は、カード 1, 2, 3, 4, 5 で A が、カード 3, 6 で B の描画が一貫して選択され、1% レベルで有意であった。カードの提示順序の差や性差はみられなかった。続いて Hall¹⁰⁾ (1957) は、1 つの言葉につき 5 つの描画を描いた 50 枚のカードを用いてシンボルとして最も相応しい描画を選ばせる実験を行った。結果はかなり個人差がみられたが、性差はなかった。また最も相応しいものとして選ばれた描画の場合は反応時間も速く、最もよいシンボルであるとみなされた。しかし、相応しいとみなす根拠は複雑で、言葉ごと



Fig. 8-3 The pairs of drawing and word used in Irwin & Newland (1940)

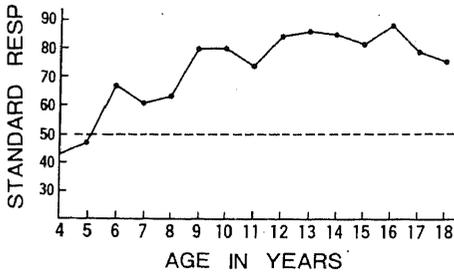


Fig. 8-4 The percents of standard responses as a function of age by Irwin & Newland (1940)

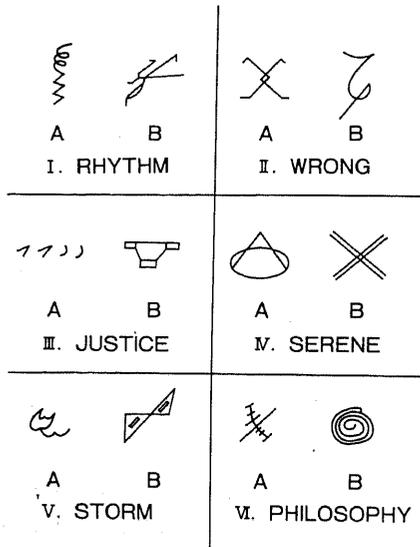


Fig. 8-5 Word-sign combinations used in Hall & Oldfield (1950)

にそれを替える傾向にあった。McMurray (1958) もやはり Bartlet の研究の流れにあるもので、Hall & Oldfield (1950) の刺激に 4 枚のカードを追加、15 の SD 尺度を導入して言葉とそれに対応する 2 つの描画同士の距離を算出した。その結果、言葉の描画に対する相応しさは SD 法での評定値から得られる内包的意味の類似性と関係があると結論した。Bartlet の記憶研究の流れの中に位置づけられるこれらの研究は、描画と音の対応づけ研究の本流からやや離れたところにあり、サインとしての描画というよりも Hall & Oldfield (1950) が用いた描画 (Fig. 6) をみても容易に理解できるように、シンボルとしての描画の研究といえる。彼らの研究はかなり後に Peterfalvi (1970) が第 4 実験で追試を行い、フランス語の単語を用いても同じ結果が得られることを示した。彼はさらに McMurray (1958) の結果をも確かめた。

Koehler (1929) の maluma と takete の対応づけ研究の系列にもどることにする。まず、直接的な追試を行ったのはゲシュタルト心理学者の Holland & Wertheimer (1964) であり、148 名のアメリカ人学生でもほぼ同じ傾向が見い出された。ただ、彼らの行った第 2 実験はこの種の研究が多くの問題をもっていることを示唆した。すなわち、彼らは maluma と takete の他に kelu という合成語を作り、当てはまりのよさを調べたが、予想通りどちらの絵にもよく当てはまらなかった。さらに、k と u のみの当てはまりのよさを調べたところ、この場合は k が直線的な絵に、u が曲線的な絵に対応した。このことは Koehler の提出した maluma (日本語のマルという単語と偶然の一致を示す) と takete という神秘的な単語が必然的なものでないことを示した。彼らは第 1 実験で 2 つの名前と絵をそれぞれ 10 の SD 尺度で評定しているが、もし同様のことが第 2 実験でなされたならば、k という文字の情緒的意味が、たまたま u という文字より直線的な絵の情緒的意味に近かったことがいえたはずである。すなわち、彼らの実験から明らかになったことは maluma という無意味綴がたまたま曲線的な絵に対応したが、それは必然的な結び付きではなく、相対的な距離の近さを示しているにすぎない。Davis (1961) も Koehler の絵に類似したものを使って交差文化的な研究を行った。被験者は 8-14 才のイギリスとタンガニーカの子供であった。第 1 実験では 1 つは頭がマルで示されている人間の線画ともう 1 つは頭が四角で示されている線画 (Fig. 8-6) を刺激とし、どちらが男でありどちらが女を示すか当てさせるものであった。予想されるように、四角い頭をもつ線画を男とする場合が多数であった。しかし、イギリスの男の子の場合のみははっきりと逆の傾向を示した。すなわち、四角い頭をもつ人物の線画を大多数は女性と判断した。Davis は特にこの

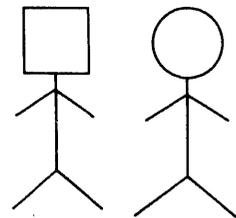


Fig. 8-6 Man or woman figures used in Davis (1961)

例外を重視していないが、文化・社会的な差異が表れたものであり興味深い。イギリスの子供にとっては大人の女性は厳しい教育者のイメージをもたれているのかもしれない。Davis の第 2 実験は Koehler タイプの絵を用いた追試であった。ただ、maluma という無意味綴はバンツー方言の malume (母の兄弟) に近すぎるので uloomu という綴に替えられていた。結果はこれまでの研究と同じく、take-te が直線からなる線画に、uloomu が曲線からなる線画にふさわしい名前であることが明らかになった。

しかし、絵にふさわしい名前を与えるこの種の研究方法は Taylor & Taylor¹⁷⁾ (1965) によって音象徴の研究の中では重要性がほとんどないと厳しく批判された。批判の第 1 点はわずかに 1 対の無意味綴を用いているだけであって、でたらめに答えたとしても 50% の人はある絵に特定の名前が相応しいと答えるはずである。第 2 点は takete と uloomu は発音を母音 (V) と子音 (C) の構造で表せば、CVCVCV と VCVCV になり、音要素のみでなく特にリズム的な構造が異っているので、どちらの影響が現れたのか実験結果から知ることはできない。第 3 は言葉がオノマトペ的であることで、たとえば taketa の場合小さなものが床で何度か跳ね返りころがる様子と解釈できるし、uloomu は軟らかい物体か液体がゆっくりと動いている様子と解釈できるとした。第 2 の批判が最も重要である。この批判は音の構造が同じである takete と maluma の場合にも当てはまる。つまり、このように長い綴の場合にはどの音要素がどういった効果をもっているのか明らかにできない。malama, mulumu, meleme, etc. というように可能な組み合わせの全てを試みる必要がある。そして、そうしない限りこの種の研究の示唆することは Taylor たちの言うように、音象徴の研究の中では重要なものとはみなせない。しかし、後にふれるように Oyama & Haga (1963) がこの種の分析を行った。

引用文献

- (1) Alspach, E. M. 1917 On the psychological response to unknown proper names. *American Journal of Psychology*, 28, 436-443.
- (2) Berlyne, D. E. 1965 *Structure and direction in thinking*. New York: John Wiley & Sons, Inc.
- (3) Bartlett, F. C. 1932 *Remembering. A study in experimental and social psychology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (4) Bloomfield, L. 1933 *Language*. New York: Henry Holt and Co. (三宅鴻・日野資純 (訳) 1962 言語 大修館)
- (5) Cassire, E. 1964 *Philosophie der symbolischen Formen. I: Die Sprache*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft. (生松敬三・坂口フミ・塚本明子 (訳) 1972 象徴形式の哲学・第一巻 言語. 竹内書店)
- (6) Davis, R. 1961 The fitness of names to drawings. A cross cultural study in Tanganyika. *British Journal of Psychology*, 52, 259-268.
- (7) English, G. 1916 On the psychological response to unknown proper names. *American Journal of Psychology*, 27, 430-434.
- (8) Fisher, S. 1922 Ueber das Entstehen und Verstehen von Namen, mit einem Beitrage zur Lehre von den transkortikalen Aphasien. *Archiv fuer die Gesamte Psychologie (Archiv fuer Psychologie)*, 42, 335-368, & 43, 32-63.
- (9) Fox, C. W. 1935 An experimental study of naming. *American Journal of Psychology*, 47, 545-579.
- (10) Hall, K. R. L. 1957 The fitness of sings to words. *British Journal of Psychology*, 42, 21-33.
- (11) Hall, K. R. L. & Oldfield, R. C. 1950 An experimental study of the fitness of signs to words. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 2, 60-70.
- (12) Herder, J. G. 1772 Abhandlung ueber den Ursprung der Sprache. Berlin: Reklam (木村直司 (訳) 1972 言語起源論 大修館)
- (13) Holland, M. K., & Wertheimer, M. 1964 Some physiognomic subjects of naming, or maluma and takete revised. *Perceptual and Motor Skills*, 19, 111-117.
- (14) Irwin, F. W., & Newland, E. 1940 A genetic study of the naming of visual figures. *Journal of Psychology*, 9, 3-16.
- (15) 岩下豊彦 1979 オズグッドの意味論と SD 法 川島書店
- (16) Jespersen, O. 1922 *Language. Its nature development and origin*. London: George Allen & Unwin Ltd.
- (17) 風間喜代三 1978 言語学の誕生——比較言語学小史—— 岩波書店.
- (18) Koehler, W. 1929 *Gestalt Psychology*. New York: Liveright (Hoerman, H. 1971 *Psycholinguistics*. Springer-Verlag. 小熊均 (訳) 1975 詳説言語心理学 誠信書房 より引用)
- (19) McMurray, G. A. 1958 A study of fittingness of signs to words by mean of the semantic differential. *Journal of Experimental Psychology*, 56, 310-311.
- (20) 守 一雄 1981 同一音素内の異音における語音象徴——語音象徴理論の再検討——, *心理学研究*, 52, 8-14.

- ㉑) 水地宗明 1974 「クラテュロス」解説。プラトン全集, 2, 411-432, 岩波書店。
- ㉒) Morris, C. W. 1938 Foundations of the theory of signs. International Encyclopedia of Unified Science, 1, No. 2. Chicago: University of Chicago Press. (Hoerman 1971 小熊(訳) 1975 より引用)
- ㉓) 村上宣寛 1980 音象徴仮説の検討——音素, SD法, 名詞及び動詞の連想語による成分の抽出と, それらのクラスター化による擬音語・擬音語の分析——教育心理学研究, 28, 183-191.
- ㉔) Newman, S. S. 1933 Further experiments in phonetic symbolism. American Journal of Psychology, 45, 53-75.
- ㉕) 永江誠司 1978 図形記憶におよぼす音声象徴言語命名の効果, 心理学研究, 48, 329-336.
- ㉖) Ogden, C. K., & Richards, I. A. 1923 The meaning of meaning. A study of the influence of language upon thought and of the science of symbolism. London: Routledge & Kegan Paul Ltd. (石橋幸太郎(訳) 1969 意味の意味 新泉社。)
- ㉗) 小熊 均(訳) 1975 H. ヘルマン 詳説言語心理学 誠信書房。
- ㉘) Parain, B. 1942 Recherches sur la nature et les fonctions du langage. Paris: Gallimard. (三嶋唯義(訳) 1972 ことばの思想史 大修館)
- ㉙) Pavlov, I. P. 1927 Lectures on conditioned reflexes. (川村浩(訳) 1975 大脳半球の働きについて——条件反射学—— 岩波書店。
- ㉚) Peterfalvi, J. M. 1970 Recherches experimentales sur le symbolisme phonétique. Monographies francaises de psychologie, No. 19. Centre national de la recherche scientifique.
- ㉛) Plato 水地宗明(訳), 1974 クラテュロス, 田中美知太郎(訳) テアイトス プラトン全集 2 岩波書店。
- ㉜) Rosenkranz, B. 1961 Der Ursprung der Sprache. Ein linguistisch - anthropologischer Versuch. Heidelberg: Carl Winter Verlag.
- ㉝) Russell, B. 1959 My philosophical development. London: George Allen & Unwin Co. (野田又夫(訳) 1960 私の哲学の発展 みすず書房)
- ㉞) Stevens, S. S. 1935 The operational basis of psychology. American Journal of Psychology, 47, 323-330.
- ㉟) Sapir, E. 1929 A study in phonetic symbolism. Journal of Experimental Psychology, 12, 225-239.
- ㊱) Saussure, F. 1949 Cours de linguistique generale. publié par Charles Bally et Albert Sechehaae. (小林英夫(訳) 1972 一般言語学議義 岩波書店)
- ㊲) 築島謙三 1941 邦語に於ける擬声語・擬態語の象徴性について。心理学研究, 16, 176-180. (a)
- ㊳) 築島謙三 1941 語音象徴に関する一考察, 心理学研究, 16, 232-253. (b)
- ㊴) 田中美知太郎 1974 「テアイトス」解説 プラトン全集 2, 433-454. 岩波書店。
- ㊵) Taylor, I. K., & Taylor, M. M. 1965 Another look at phonetic symbolism. Psychological Bulletin, 64, 413-427.
- ㊶) Usnadze, D. 1924 Ein experimenteller Beitrag zum Problem der psychologischen Grundlagen der Namengebung. Psychologische Forschung, 5, 24-43.
- ㊷) 渡辺昇一 1973 言語と民族の起源について, 大修館。
- ㊸) Watson, J. B. 1930 Behaviorism. New York: Norton & Company, Inc. Revised Ed. (安田一郎(訳) 1968 行動主義の心理学, 河出書房新社)
- ㊹) Werner, H. 1929 Ueber die Sprachphysiognomie als einer neuen Methode der vergleichenden Sprachbetrachtung. Zeitschrift fuer Psychologie, 109, 337-368.
- ㊺) Wittgenstein, L. 1958 Philosophische Untersuchungen. Oxford: Basil Blackwell & Mott, Ltd.
- ㊻) 米沢 茂 1977 「ソクラテスの夢」と製作的技術知 古代哲学研究 METHODOS, 9, 21-32.